

# 今週の為替相場見通し(2021年5月10日)

| 総括表      |      | 先々週と先週の値動き |                 |        | 今週の予想レンジ        |
|----------|------|------------|-----------------|--------|-----------------|
|          |      | 注          | レンジ             | 終値     |                 |
| 米ドル      | (円)  |            | 107.65 ~ 109.69 | 108.58 | 107.00 ~ 109.00 |
| ユーロ      | (ドル) |            | 1.1986 ~ 1.2171 | 1.2163 | 1.2080 ~ 1.2250 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |            | 130.22 ~ 132.35 | 132.08 | 131.10 ~ 133.50 |
| 英ポンド     | (ドル) |            | 1.3803 ~ 1.4005 | 1.3989 | 1.3850 ~ 1.4050 |
| (1英ポンド=) | (円)  | *          | 149.54 ~ 152.41 | 151.87 | 150.00 ~ 153.00 |
| 豪ドル      | (ドル) |            | 0.7675 ~ 0.7863 | 0.7846 | 0.7720 ~ 0.7880 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | *          | 83.50 ~ 85.32   | 85.18  | 83.50 ~ 85.50   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1)今週の予想レンジ: 107.00 ~ 109.00 円

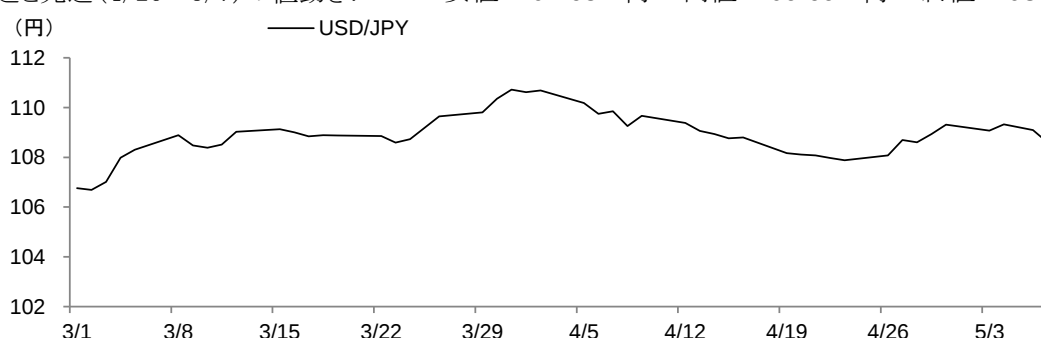
(2)ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

直近2週間のドル/円相場は、4月末週に一時109円台後半までドル高円安が進行したが、先週は週後半にかけてじりじりと値を下げる展開となった。先月末週の26日、107円台後半でオープンしたドル/円は、27日には、日銀金融政策決定会合において、黒田総裁が23年までに物価上昇率2%の目標に届かないと発言したことを受けて円売り優勢の展開となった。加えて、堅調な米経済指標の結果や米金利上昇の影響を受けてドル高が進み、ドル/円は109円を上抜ける動きとなった。FOMCでは、インフレ率の上昇が一時的であることに加え、金融緩和の長期化が示唆される内容であったことから、米金利が急落し、ドル売りが強まり108円台半ばまで値を下げる場面も見られた。その後は、米金利の反発も見られ再び109円台を回復した。先週初3日は、同じく109円台前半にてオープンし、日本、中国、英国が休場で閑散取引の中、週末からのドル買いが継続し、一時週高値の109.69円まで上昇した。その後は、米金利が下落する動きに一時ドル売りが強まり108.90円まで下落する場面も見られた。4日には、イエレン米財務長官が金利上昇を示唆する発言をすると、米金利が上昇し、ドル買いが優勢となる場面も見られたが、その後は、米金利下落を受けてじり安となった。週末7日のドル/円は109円付近での取引が継続したのち、米4月雇用統計の結果が予想を大きく下回りドル売りが優勢となった。ドル/円も一時週安値108円台前半まで下落し、108円半ば付近でクローズした。

今週は先週末の流れを引き継ぎドル売りが優勢となると予想。先週末の米4月雇用統計の結果は雇用者数変化にて予想比大幅に下振れた。これを受けて米10年債利回りは一時1.5%を下回った。雇用の回復に時間がかかることが示され、緩和的金融政策継続の必然性を感じた市場参加者も多かったかもしれない。今回の結果は、順調な経済回復を背景に金融政策引き締めへの転換を展望していた向きにとっては失望に繋がり、米金利上昇を背景としたドル買いは失速するのではないかと。今週は12日(水)に米4月CPI、14日(金)に米4月小売売上高の発表などが予定されている。経済回復が見られても雇用への悲観的な見方がドル買いを抑制しそうだ。

## (3)先週末までの相場の推移

先々週と先週(4/26~5/7)の値動き: 安値 107.65 円 高値 109.69 円 終値 108.58 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 木村 優太

(1)今週の予想レンジ: 1.2080 ~ 1.2250 131.10 ~ 133.50 円

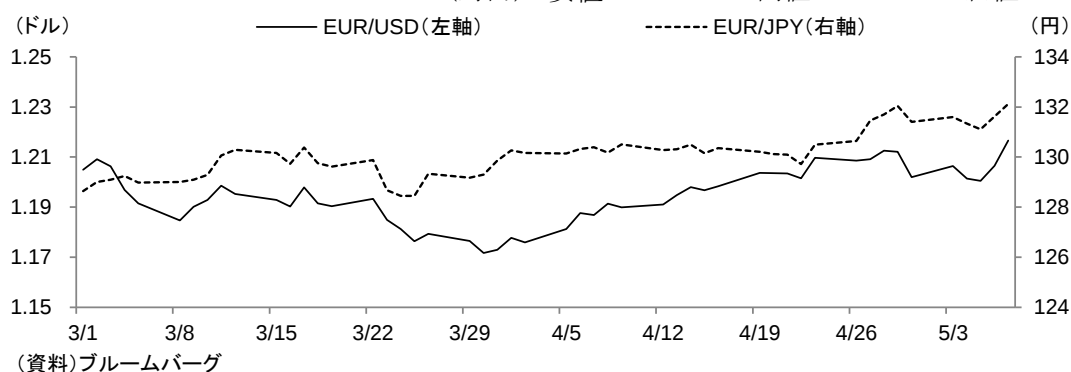
## (2)ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

先々週からのユーロ相場は往って来いの展開から、先週末に米雇用統計の結果を受けて上昇した。好調な経済指標からユーロ圏の経済活動再開への期待からユーロ/ドルは4月初め以降堅調推移が続いており、26日に1.20後半でスタートした後もその流れを継いで堅調推移し、一時1.21台に乗せたものの利益確定の勢いに押され、FOMC前は1.20後半での推移となる。注目された28日のFOMCは政策金利の据え置きや資産買い入れ額の維持などは想定内の内容でありつつ、インフレ率の上昇が一時的なものであることを強調。テーパリングへの警戒感が和らいだことでドル売りが強まり1.21台を再び回復し、29日に1.2150まで上昇。しかし米国の金融正常化への動きが意識されて米金利が再び上昇し、その影響でユーロ/ドルは軟調に推移。30日にはカプラン・ダラス総裁がテーパリングの可能性を示唆したことや、米株の軟調推移に伴うリスクオフのドル買いの影響で1.20前半まで下落した。3日は米金利低下の流れに加えて米4月ISM製造業景況指数が予想を下回ったことで1.20後半まで戻すも翌日には再び下落。5日は米金利が下落分の半値戻しをする一方、米4月ADP雇用統計が予想を下回ったことから1.2ちょうど近辺での小動きとなる。6日は海外時間に米金利が低下する動きから1.20後半まで上昇。7日はECB高官が債券購入ペース減速の可能性を示唆したことで一時1.2090まで上昇し、さらに米4月雇用統計が予想を大きく下回ったことでドル売りが加速。4月高値を上抜けて1.2171をつけ、1.21後半で越過となった。

今週のユーロ相場は堅調推移を想定。3月以降、米国でのワクチン接種の浸透を筆頭に、欧米での経済活動の再開への期待が高まっている。その中で、米国と欧州でのコロナからの脱却ペースの見通しの変化が為替相場に影響を与えており、また4月後半にカナダ中銀が米国に先駆けてテーパリングの可能性に言及したことにより、他の欧米各国での金融緩和の正常化への懸念が強まっている。その中ですでにテーパリングの可能性に関する言及が報道された欧州と、米4月雇用統計の結果が振るわず、金融緩和の継続を意識せざるおえない米国では、欧州の方がより進展が好感される形になったかと思われるため、ユーロ相場は堅調推移を見込んでいる。ただし、年初来高値である1.2327を超えるにはまだ材料不足に思われるので、1.22台乗せを目指しつつ、新たな材料を探る展開となると予想する。

## (3)先週までの相場の推移

先々週と先週(4/26~5/7)の値動き: (対ドル) 安値 1.1986 高値 1.2171 終値 1.2163  
(対円) 安値 130.22 高値 132.35 終値 132.08



## 3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3850 ~ 1.4050 150.00 ~ 153.00 円

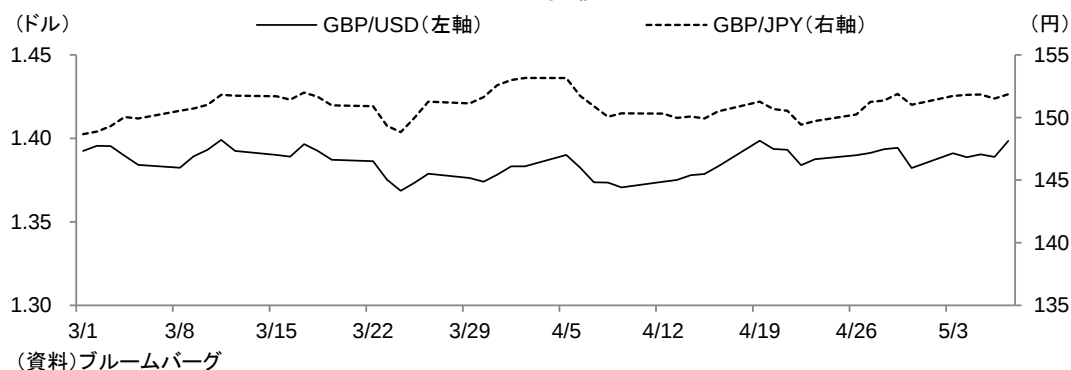
## (2) ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

先週/先々週の英ポンド相場は、局地的に細かい上下動を見せたものの、振り返ってみれば堅調気味の横這い。27日から29日に掛けてはポンド/円がじりじりと水準を切り上げたが、これは円全面安の一環。27日、同日の日銀金融政策決定会合後に発表された展望レポートが、黒田総裁が任期を迎える2023年4月までに+2%の物価誘導目標は達成できない可能性を示唆したことが円全面安を誘った。30日にはポンド/ドルが急落したが、これもドル高の結果で、ダラス連銀のカプラン総裁が「早急に資産購入の調整(=縮小)に関する議論を始めるのが適切」と述べたことがドル全面高を煽った。3日のポンド急反発は、英市場が休場な中進んだが、その後5日まで続いたユーロ/ポンドの下押し(ポンド高)に鑑みると、6日の英中銀金融政策委員会に向けた「テーパリング」開始期待が、3日のポンド/ドル急落からの調整的反発、英休場による流動性低下などの要因と相俟って、値動きを増幅させたと考えられた。果たして、6日、同委員会は、基準金利(0.10%)、資産購入(量的緩和)額上限(8,975億ポンド)をそれぞれ据え置く一方、英景気の力強い回復に自信を示し、資産購入策に基づく国債などの購入ペースを減速させていく方針を発表した。ただ、こうした方針は事前に広く予想されていた上、テーパリングの定義を「保有資産規模の段階的縮小」とするなら、ベイリー総裁自身が述べていた通り、今般の決断はテーパリングには該当しない。前後してポンドはむしろ軟調気味に推移、とりわけ対ユーロでは明確な反落を見せた。7日のポンド/ドル急騰は、米4月雇用統計に対する失望を受けたドル全面安で、同局面、対円、対ユーロでは、ポンドはほとんど値幅を出さなかった。

今週の英ポンド相場は、軟調を予想。ポンド軟調を目先の予想の中心に据えるのは、ドル高と、スコットランド独立機運の高まりを警戒するから。4日にはイエレン米財務長官が「景気過熱を防ぐためにいくらかの利上げが必要になるかもしれない」という発言をしていた。同長官自身が、その後、「利上げ開始を示唆したわけではない」などと躍起になって否定したこともあり、市場の反応は限定的にとどまったものの、上述、カプラン総裁発言に前後しての、前米連銀議長の発言は軽くない。米4月非農業部門雇用者数に対する失望を受け、米長期金利は低下、ドルも全面安に振れたが、並行して米株価は続騰。資産インフレは着実に進行しているし、小麦、銅、木材などの足下価格推移は、消費者インフレもすぐそこまで迫っている可能性を示している。仮に、世界的な消費者インフレが現実のものになるとしたら、主要国/経済の中で真っ先に金融引き締めに転じるのは、やはり米国である可能性が高い。こうした思惑が、ドル押し上げに貢献する展開も、そう遠い将来のことではないように思われる。6日実施された英統一地方選・予備選の結果は、イングランドにおいては与党保守党の大勝、最大野党労働党の大敗という構図を描けたものの、スコットランド議会選挙においてスコットランド民族党(SNP)が、単独過半数には1議席足りなかったものの、議席数を増やした事実は、ジョンソン首相にとって頭に痛い結果だったと思われる。同党はスコットランド独立の是非を問う国民投票のやり直しを要求しているからだ。英のEU離脱後の北アイルランドの混乱(英国帰属派の不満の高まりなど)に加え、連合王国分裂の現実味が、市場が看過できない水準まで高まる可能性も考えられる。英経済指標は、12日(水)に英1~3月期GDP暫定値、英3月鉱工業・製造業生産、英3月商品貿易収支などの発表が集中するが、英経済指標に対する検診は高いものと思われる。

## (3) 先週末までの相場の推移

先々週と先週(4/26~5/7)の値動き: (対ドル) 安値 1.3803 高値 1.4005 終値 1.3989  
(対円) 安値 149.54 高値 152.41 終値 151.87



## 4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 0.7720 ~ 0.7880 83.50 ~ 85.50 円

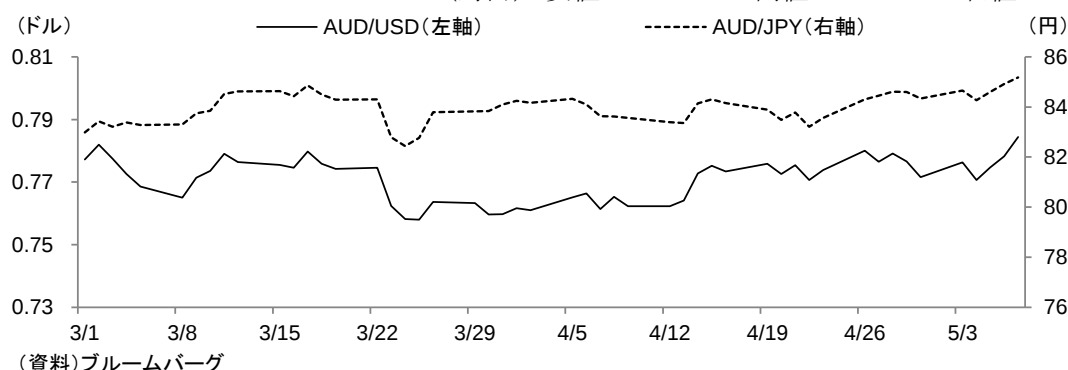
## (2) ポイント【先々週と先週の回顧と今週の見通し】

前々週(26日週)の豪ドル相場は0.77台半ばを中心としたレンジ推移。26日は0.7750レベルでオープン後、米株先物や鉄鋼石価格の値上がりをサポート材料に上昇し、NY時間入り後も堅調な企業決算を背景にS&Pが最高値を更新するなどリスクオン色が強まる中で豪ドルはさらに上値を追い一時0.7815まで上昇する場面があった。もっとも、翌27日は月末のドル買いフローなどに押されて軟調に推移。翌日からFOMCを控えて米金利が上昇する流れに豪ドルは一段と売り優勢の中0.7762まで下落。さらに28日は、豪1QCPIの伸びが市場予想を大幅に下回ったことで一時0.7726の安値を付けた。その後、注目されたFOMCでは特段のサプライズなく、米金利が低下する流れに豪ドルは0.78台まで上昇する展開となった。29日は米株の上昇を横目に序盤から買い優勢となり一時0.7818まで上昇。しかし、米1QGDPや米個人消費など良好な経済指標を受けて米金利が反発しドル買い優勢の中、豪ドルは上値の重い展開となった。30日は、底堅い資源価格を背景に小高く推移するも、欧州時間にカプラン・ダラス連銀総裁のテーパリング議論の必要性を示唆する発言を受けてドル買いが優勢の中、豪ドルは下落し0.7714で越週。前週(5月3日週)の豪ドル相場は週後半にかけて上昇する展開。3日、本邦含め複数市場が休場で動意に乏しい中、0.7760レベルまで小高く推移するも上値は限定的。翌4日はRBA後に一時上昇するもその後は上値重く推移。この日注目されたRBAでは政策金利の据え置きが決定されたものの、経済成長率見通しを上方修正したほか金融機関向けの資金支援策を延長しないことを決定し豪ドルサポートとなったが、資産購入プログラムの長期維持が確認され豪ドル買いも一服。その後も米株下落や米金利上昇を眺めつつ0.7675まで下落する展開。5日は米金利上昇一服感から小幅に反発するも、引き続き本邦や中国休場の中動意に欠け0.77台前半から半ばでのレンジ推移。6日は下方向に往ってこの展開。豪3月企業景況感など経済指標が前回を大幅に上回る結果に小高く反応も、その後中国国家発展改革委員会が豪州との戦略経済対話を無期限停止するとのヘッドラインを受けて急落し一時0.7701まで下落。もっともその後は米金利の上値重くドルが軟調な動きを見せる中、0.7780付近まで反発。7日は米4月雇用統計を控えて様子見となるも米雇用統計の結果が市場予想を大きく下回りドル売りが強まる中で豪ドルは急上昇し一時0.7863レベルまで上伸する展開となった。

今週の豪ドル相場は底堅い展開を予想。前週末の米4月雇用統計の弱い結果を受けたドル売りの流れを引き継ぎ豪ドルは買い優勢でのスタートとなりそう。ネガティブサプライズとなった米4月雇用統計であるが、平均時給(前月比)の回復や非農業部門雇用者数については3ヵ月平均で着実な回復が確認できていることなどから本格的なリスクオフとはなりづらく、むしろ欧米中心にワクチン接種が進み行動制限の段階的緩和が相次いで示されていることを受けたリスクオンが継続するものと考え。ドル買い戻しにより豪ドルは積極的に上値を迫る展開は想定しづらいが、基本的には堅調な株式市場と資源価格にサポートされながら豪ドルは底堅い推移を予想する。なお、金融緩和を巡ってRBAは資産購入プログラム第2弾の今後の措置を7月に検討するとしている。ただし、先週デベル副総裁は経済回復を一定程度確認しつつも、国内賃金伸びの鈍化を指摘し大規模金融政策の必要性を訴えていることもあり政策変更を期待する向きは少なく影響は限定的か。むしろ、先週ヘッドラインとして浮上した中国との関係を巡る懸念材料が豪ドル上昇を阻む可能性もあり警戒したいところ。今週の主要イベントとしては12日のクラリダ副議長を始めFRB当局者の講演や発言の機会を複数予定しているほか、経済指標は10日(月)に豪4月NAB企業景況感・信頼感、豪3月小売売上高(確報値)などを控えている。

## (3) 先週までの相場の推移

先々週と先週(4/26~5/7)の値動き: (対ドル) 安値 0.7675 高値 0.7863 終値 0.7846  
(対円) 安値 83.50 高値 85.32 終値 85.18



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償のみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。